

『ベオウルフ』における「フロースガール王の説教」の意図は何か

What is the Intention of 'Hrothgar's Sermon' in Beowulf?

荻部 恒徳*

要旨

古英語叙事詩『ベオウルフ』は8世紀中ごろイングランドで成立したと見られる、北欧を舞台に英雄ベオウルフの生涯を物語った、ヨーロッパ語での最初の叙事詩である。前半は、今はなきイエータス国の若き英雄ベオウルフが隣国デネ（デンマーク）の宮廷を12年間悩まし続ける怪物グレンデル退治に向かい、これを首尾よく退治し、わが子の復讐に來襲し廷臣を連れ去った母親も、その湖底の棲家に赴いて退治する。（後半は50年後、故国の王となったベオウルフが国土を焼き払う火龍と対決し、若武者の助太刀でこれを退治するも、自らも致命傷を負って死ぬ。）本論の「フロースガール王の説教」は前半のクライマックスをなすもので、怪物の湖底の棲家からグレンデルの首級と、彼らの毒血で刃が熔けてなくなった、巨人の作なる刀の柄を戦勝記念に持ち帰ったベオウルフに、彼を迎えたデンマークの老賢王のフロースガールが垂れる説教の意図を以下に考察した。重々しい述べ方と内容によって、王としての威厳を保つためのものであったとの結論に達した。

前置き

古英語叙事詩 *Beowulf* における「Hrothgar 王の説教」は、*Beowulf* を始めて読んだときから、物語全体の流れの中で唐突感と違和感を覚えた部分であった。と言ってもその感覚は、現代人が説教というものになじまなくなったといった一般論ではなく、筆者のこの作品の解釈法に由来する個別的な感覚なのである。その頃の *Beowulf* 解釈は、教父たちの聖書釈義を当てはめた Hamilton (1946), Kaske (1958), Goldsmith (1963 and 1970)¹ などによる 'Exegetic approach' の全盛時代だったので、St Augustin, Pope Gregory, St Ambrose などの聖書釈義に通じなければ *Beowulf* を正しく読めないのかと恐怖した記憶がある。しかし聖書釈義の問題を脇に置いて、主人公 *Beowulf* のたどった道を歩む時、この説教は、道中の中ごろに道をふさぐように転がっている巨石、悪く言えば障害物のように思え、いつか自分なりに納得の行く仕方ですべてを処理、つまり解釈しなければ、作品 *Beowulf* の読みを全うしえないと思え、課題となったのであった。

筆者がこの説教に覚えた唐突感・違和感は、当時は漠然としたものだったが、最近ようやくその理由が分かってきた。若き英雄 *Beowulf* と老王 Hrothgar が活躍する第1部（1-2199行、以下2200-3182行が第2部）を解釈するに際して、若き他国の英雄と賢い老王という、よって立つ基盤・原理が全く異なる対照的なこの二人の人物の間に、鋳迫り合い・葛藤の目に見えぬ心理的ドラマがあるのを発見した。² この説教をここに至る二人の主人公の葛藤のドラマと関連付けて解釈してみたい。

では、どんなドラマがあると見ているか説明しよう。怪物 Grendel 退治に訪れた異国 (Geatas) の王子 *Beowulf* を迎えて Dene の国王 Hrothgar はこう述べる。昔、他部族の者を殺めたため亡命してきた彼の父親 Ecgtheow を受け入れ、人命金 (wergild) まで払って争いを解決してやったことがあるが、彼はその父が受けた恩を返しに来てくれたのだろう (457-90行) と。しかし、詩人も *Beowulf* 本人もそれまで彼の父親 Ecgtheow の過去のことは一言も言及していない。

この Hrothgar の言葉に *Beowulf* は応答しない。応答しないのは当然である。父の受けた恩義を返しに來たと言えは Hrothgar の思う壺にはまる。Dene の人たちの倒せない強敵を倒し、武士としての名を上げるために來たと本心を言えば、Hrothgar の面子をつぶすことになるからである。Hrothgar の顧問官 Unferth が宮廷儀礼を守らず *Beowulf* に桶突くのは、Dene 宮廷の屈辱感の裏返し表現なのである。思うに詩人は、両者の鋳迫り合いのドラマを仕掛けたのである。Grendel を倒して目的を果たし、Dene を救ってくれた救国の英雄に

*KARIBE, Tsunenori [情報システム学科]

Hrothgar 王は大きな借りができた。Dene の宮廷が 12 年間なし得なかったことを一夜にして異国の若武者 Beowulf が成し遂げてくれたのである。この偉業に対し当然感謝はするが、王の面目がつぶれたことも確かである。戦勝の宴を開き、黄金の軍旗・鎧兜・宝刀からなる豪華な贈物で報いたが、屈辱感を胸に秘めた Hrothgar は威厳を保つにはまだ不十分である。両者の力関係のバランスを保ち、さらに優位に立つにはどうしたらよいか。ここで Hrothgar が考えたのが、まず、養子縁組である (946b-49a 行)。

これで Grendel への復讐は他国の英雄による代理復讐ではなく、Dene の王子による復讐になり、この新たな親族関係により Beowulf の国 Geatas との将来起こりうる争いも予防できるかもしれない。一石二鳥なのである。Hrothgar はさすがに知恵者である。しかし、またまた両者のバランスが崩れることが起こる。Grendel の母親の思いもかけぬ襲来である。このあたりの物語は日本の「渡辺綱の鬼退治」に似ている。この母親退治も Beowulf に頼らざるを得ないことになる。彼女の湖底の棲家に赴いて難敵を切り倒し、死んで横たわる Grendel の首も切り取った剣を土産に凱旋した Beowulf に Hrothgar は再び祝宴を張り、贈物を追加する約束はしたが、まだ王の威厳を保つには足りないのである。

そう悟った Hrothgar が、土産の剣の、神によって洪水で滅ぼされた巨人族のことがルーン文字で刻まれた柄を眺めながら、突然始めるのがこの説教なのである。洪水で滅ぼされた巨人族は、Grendel 親子がその末裔だと言われている Cain につながるものであり、巨人族も Cain も傲慢の罪で滅ぼされたことになっていることから、説教の主題は傲慢の罪であることは間違いない。話を先取りすると、この説教のパンチ力は強烈で、Hrothgar は所期の目的を達成する。Beowulf はこの一方的になされた説教を無視することで無言の抵抗を示したと考えられる。

本論

前置きが長くなったが、ここで本題の「説教」の分析に入る。説教の冒頭 (1703b-06b 行) で Hrothgar は、Beowulf の名声がこれによって広く確立した。君は知恵と腕力 (*sapientia et fortitudo*) を兼ね備えていると賛美するのは良いとして、その前の開口一番 (1700-02a 行) のもったいぶった言葉「真に、こう言うものだ、誠と正義とを / 国民の間で行ない、過去をすべて記憶する者、/ 年取った国の守護者は」と言って、Beowulf を賛美する資格が自分にあることをわざわざ誇示するのは、常に自分の威厳を維持したい彼の心の現われである。それに加えて注目すべきは、1703b 行で *Blæd is āræred* 「名声は確立した」と持ち上げておいて、もう一度後半の 1761b-62a 行で同じキーワードの *blæd* 「名声・評判」を用いて、*Nū is pīnes mægnes blæd / āne hwīl* 「君の力の評判は今 / 一時である」と引き下ろすのは老獪なレトリックではないだろうか。国王と偉業を成し遂げた英雄との力のアンバランスは、贈物によって回復されるので、1706b-7a 行 *Īc þe sceal mīne gelaestan / frēode, swā wit furðum spræcon* 「わしは君にわしの友情を果たさねばならぬ、/ 我ら二人が少し前に話し合ったように」は漠然とした表現だが、贈物の約束に言及したものである。

次に Beowulf が将来国を治める身分になるだろうと仮定して、1709b-22a 行で悪い王の見本として Heremod を挙げる。Heremod についてはすでに 902b-13a 行で、詩人が Dene の歌人に Grendel を倒した Beowulf を賛美する歌物語の中で言及させ、915b 行で *hine fyren onwōd* 「罪業が彼にとりついたのだった」と締めくくっていたが、その罪業を Hrothgar が Sermon で取り上げるという趣向になっている。ここでは彼と家臣たちとの関係においてその罪業が具体的に語られる。1709b-15b 行では、彼は怒りにまかせて家臣らを殺し、追放の身になって、最期は無残な死を遂げたと語り、次の 1716a-18a 行で神の信仰者らしく、全能の神が彼をそうした国王の地位に押し上げてくださったにもかかわらず云々、と付け足す。

次の 1719b-22a 行で、ゲルマンの共同体では、国王が臣下に宝物の贈物をし、臣下が戦役で奉仕するという互酬制度が体制維持に最も重要な柱であるが、宝物を分配する国王の義務を彼が放棄したために、家臣団との間に不和が生じ、宮廷の喜びを奪われ苦痛をなめたことを述べ、1722b-24a 行で、これを教訓とせよと Beowulf に語りかけるのである。ここでも冒頭と同じように、*Īc þis gīd be þe / āwraec wintrum frōd* 「わしはこの物語を君のため / 齢重ねた知恵者として語ったのだ」と、自分が知恵者であることを強調せずにいられないのが彼の性格なのである。

Hrothgar がこういう王にはなるなと、極悪非道の Heremod を例に引いたのは、fair でないと思っている。前に歌人によって Beowulf と同じく賞賛の対象であるゲルマンの英雄 Sygemund の引き立て役 (foil) として Heremod が例に引かれたのは問題でない。しかし今度は問題である。Beowulf が将来なるかもしれない負のイメージとして Heremod の影を Beowulf に背負わせることになるからで、これは一種の脅しであり、巧妙な中傷である。

次の 1724b-27b 行からは Heremod を離れ、より一般的に無名の王者の陥る危険を述べる。知恵と土地と身分は神の贈物であると、後のキリスト教詩 *Christ* (664-68a 行) にも詠まれ、おそらく当時すでにキリスト教徒の常識になっていたことに言及し、続く 1728a-34b 行では、神からのこうした授かりものを特に享受するのは国王で、宮廷でこの世の喜びを保持できるのも、実は神のお蔭なのに、わが身の終わりを思うことができなくなるのだと、この世のすべてが神の支配の下にあることを、Hrothgar は一神教信者 (monotheist) らしく強調する。続けて 1735a-42a 行で、繁栄と安寧と平和のうちに身を置き、*ac him eal worold / wended on willan* 「全世界が彼の / 意のままに動く」と慢心していると、最悪の「傲慢」*oferhygda* が生じ増大すると、この説教の眼目である「傲慢」が登場する。³

次の 1741b-47b 行で、傲慢が人の心に生じるさまを、教父たちが用いた比喻を援用して述べる。慢心した人の良心が眠っている間に心臓めがけて悪魔が傲慢の矢を射てくるので防げない、というのである。次の 1748a-57b では、傲慢に取り付かれた王はどうなるか、やや理屈っぽく Heremod 現象を繰り返して述べる。臣下との絆など取るに足らなく思え、宝物を与えなくなり、王の権能は神が賜った栄誉なのに、それを忘れて死に至り、宝を分配する別の王に取って代わられる、とここでも語るのである。この説教における傲慢の意味は、慢心した王子や王が互惠制度の共同体のルールを一方的に破って臣下にそむかれ、追放の身で哀れな最期を迎える原因と解釈でき、ゲルマン社会の現実に関掛けた明快な主題にはなっている。

Hrothgar は 1758a-62a 行で、再度 Beowulf に呼びかけて、傲慢など心に懷かぬようにと警告するが、このような傲慢は Beowulf が抱く可能性のない感情であると思われる以上、意地の悪い説教のための説教とはならないだろうか。Hrothgar は 1759b-60a で *ēce rædas* (1760a) 「永遠のご利益」⁴ を選ぶように Beowulf に忠告する。この句は議論の多いところで、キリスト教的意味に解すれば「死後の魂の救済」(eternal salvation. そのための敬神・善行など) であり、非キリスト教的意味では「死後に残す名声」(そのための武功・善政など) になると思われる。詩人は両義性を意図し、Hrothgar はキリスト教的意味で用い、Beowulf は非キリスト教的意味で受け取るように按配したのだと思われる。しかしいずれにしろここは、反 Heremod 的な立派な倫理的生き方を勧告したのであろう。

次の 1762b-68b 行では、人の命を予告なく奪う 8 つの動因 (agents) を A or B or C... と列挙した構文を用いて「死を忘れるな」(*memento mori*) と述べているが、これは散文の説教集 (*homilies*) でよく見られる常套句であると言われている。しかし、人に死をもたらすものについては、古今東西同ような発想があるわけで、ゲルマンではそれを一種の宗教観念と言ってもいい無常観 (*fatalism*) にまで高めたのであり、キリスト教では神に救いを求める理由にしたのだらうと思われる。詩人はキリスト教文学や神学の知識に関心を持っていたと思われるが、それを引喩の形で Hrothgar の説教に集中的に適用し、Hrothgar の、説教者にふさわしい教訓癖のある聖職者的性格付けに利用したのだと考えられる。次に Hrothgar は自分の運命を語る。

1769a-78a 行では Grendel の襲来による自分の運命の逆転を語るが、ここでもまた 50 年間、国を治め無敵を誇ったと自己賛美・自己肯定の前置きで始まるのである。この運命の逆転を感情表現の常套句で *gryn æfter gomene* (1775a) 「喜びの後に悲しみ」が訪れたと述べているが、ここで重要なのは、Hrothgar に自分も傲慢の罪を犯していたという自責の念が見られるかどうかである。研究者の中でもキリスト教的解釈に重点を置く人たちが、Brodeur, Goldsmith⁵ らは見られると言っているが、筆者にはまったくそうは感じられない。自分の過去を誇り、それ故に招いたかも知れない運命の逆転の原因 (黄金の館 Heorot を建て怪物 Grendel 親子の来襲を受けたのは自分の傲慢のせいであった) には触れず、心に鎧をかたくなにまとっている。この態度は後年 Beowulf が火龍に宮殿を焼き払われたときに、何か罪悪感を覚えるイノセントな彼の姿勢⁶ とは対照的である。しかも Hrothgar は次の 1778b-81b 行では、Grendel の首級を眺めることができたことを神に感謝しよう

と締めくくり、この後 1782a-84b で彼を祝宴に誘い、明日の宝物の授受を約束して説教を終える。神への感謝も結構だが、これはよく見られる、人のお蔭を語らず、何事も神様仏様のお蔭と祈りを唱える信者に余りにも似てまいいか。

この国王の威信を第一に考える Hrothgar は、Beowulf に国を救ってくれて有難うと素直に言えなかったのである。これによって筆者のように反感を懐く者も出て来るし、知恵に長けた立派な王だと尊敬する人も出てくることになる。このように王が王子に、父親が息子に行う形をとった説教は 8 世紀中ごろの宗教家 Alcuin も用いていると W. C. Bolton⁷ は指摘しているが、内容的には共通点は少ない。また、王子教育、帝王学あるいは処世訓といった実用的な目的を持ったものでもない。しかしこの Hrothgar の説教は、実際に父の Hrothgar が子の Beowulf に垂れた parental sermon であると主張する非常にナイーブな Hansen⁸ の論文の存在を知って驚かざるを得なかった。

結論

勇気を持って強敵に立ち向かい、これを倒すという偉業を成し遂げ、名声を勝ち取った若き英雄に対し、何とか国王の威厳を保ちたいと老獪な知恵で対抗する老王との確執という目に見えないドラマを見てきた筆者には、この説教がその確執のクライマックスになるのである。このように解釈することによって最初覚えた唐突感と違和感の原因が自分なりに分かった気がする。この説教は Hrothgar にとって起死回生を図る重要なポイントになっており、この説教と、その後に豪華な贈物で報いたことにより、国王の威厳は無事保たれたのである。だからこそ、この後は気を緩めた彼は Beowulf を抱き別れのキスをする好々爺になれたということである。説教とは未来についての教訓を含むものであり、Hrothgar の説教を第 2 部で国王になった Beowulf の生き方と関連（あまりないとの推測だが、それがあってもいいかも含めて）付けるのが当然であるが、その問題は別の機会に論じたい。以上、Hrothgar の説教をこのように読むことによって、道の真ん中に置かれ通行を妨げていた巨石をどかせないまでも、少し脇へ押しやって通れるようになったのではと感じているが、どうだろうか。

資料・Hrothgar's Sermon (ll. 1700-1784) の対訳

1700 "pæt, lā. mæg seġan, sē þe sōð ond riht
fremed on folce, feor eal ġemon,
eald ēdel-weard, pæt ðes eorl wære
ġeboren betera! Blæd is āræred
ġeond wīd-wegas, wine mīn Bēowulf,
1705 ðīn ofer þeoda ġehwylce. Eal þū hit
ġeþyldum healdest,
mæġen mid mōdes snyttrum. Ic þē sceal
mīne ġelæstan
frēode, swā wit furðum spræcon. Ðū scealt
tō frōfre weorþan
eal lang-twidīg lēodum þīnum,
hæledum tō helpe. Ne wearð Heremōd swā
1710 eaforum Ecgwelan, Ār-Scýldingum.
Ne ġewēox hē him tō willan, ac tō wæl-fealle
ond tō dēað-cwalum Deniġa lēodum;
brēat bolgen-mōd bēod-ġenēatas,
eal-ġesteallan, op pæt hē āna hwearf,
1715 mære þeoden, mon-drēamum from,

1700 『真に、こう言うものだ、誠と正義とを
国民の間で行ない、過去をすべて記憶する者、
年取った国の守護者(H)は、この貴人こそ
誰よりも生まれ良き人である！ 名声は確立した
遠くの地域まで、わが友ベアウルフよ、
1705 君の名声はすべての民族の上に。君はそれをすべて
しかと御しておる、
腕力を心の知恵をもって。わしは君にわしの友情を
果たさねばならぬ、
我ら二人が少し前に話し合ったように。君は慰めと
なろう、
長き間に渡り、君の国民の
武士たちの助けとな。ヘレモードは違った、
1710 エッジウェラの子ら、「誉れの」シュルデンガスにとっては。
彼は長じて彼らの喜びとはならず、殺害と
無残な死をもたらした、デネの国民にとって。
彼は怒りに任せて殺害した、食卓の仲間らを、
肩触れ合う友達を、ついに彼はただ独り去った、
1715 名高き王は、人の世の喜びから、

- ðeah þe hine mihtig God mægenes wynnum,
eafepum stēpte. ofer ealle men.
forð gefremede. Hwæpere him on ferhþe grēow
brēost-hord blōd-rēow; nallas bēagas geaf
- 1720 Denum æfter dōme. Drēam-lēas gebād,
þæt hē þæs gewinnes weorc prōwade,
lēod-bealo longsum. Ðū þe lær be þon,
gum-cystie ongit! Ic þis gīd be þe
āwræc wintrum frōd. Wundor is tō secganne,
- 1725 hū mihtig God manna cynne
þurh sīdne sefan snyttru bryttað,
eard ond eorl-scipe; hē āh ealra geweald.
Hwīlum hē on lufan lāted hworfan
monnes mōd-geþonc mæran cynnes;
- 1730 seleð him on ēple eorþan wyne
tō healdanne hlēo-burh wera;
gedēð him swā gewealdene worolde dælas,
sīde rīce, þæt hē his selfa ne mæg
for his unsnyttrum ende geþencean.
- 1735 Wunað hē on wiste. nō hine wiht dweleð,
ād! nē yldo, nē him inwit-sorh
on sefan sweorced, nē gesacu ōhwær
ecg-hete ēoweð, ac him eal worold
wendeð on willan. Hē þæt wyrse ne con —
XXV.
- 1740 oð þæt him on innan ofer-hygdā dæl
weaxe[ð] ond wrīdāð, þonne se weard swefeð,
sāwele hyrde; bið se slæp tō fæst,
bisgum gebunden; bona swīde nēah.
sē þe of flān-bogan fyrenum scēoted.
- 1745 þonne bið on hrepre under helm drepen
biteran stræle — him bebeorgan ne con —
wōm wundor-bebodum wergan gāstes;
þinceð him tō lýtēl, þæt hē lange hēold;
- gýt-sað grom-hydg, nallas on gýlp seleð
- 1750 fæ[tu]le bēagas, ond hē þa forðgesceaft
forgyteð ond forgymeð, þæs þe him ær God sealde,
wuldres Waldend, weorð-mynda dæl.
Hit on ende-stæf eft gelimpeð,
þæt se līc-homa læne gedreoseð,
- 1755 fæge gefealleð; fēhð ōper tō,
sē þe unmunlīce mādmas dæleþ,
eorles ær-gestreon, egesan ne gýmeð.

- もつとも全能の神が彼を 御力の喜びもて、
盛んに持ち上げ給い、すべての人の上に
押し上げ給うたのだが。だが彼の心に生じた
血に飢えた胸の思いが；宝環を与えなかった、
1720 誉れを求めるデネの人たちに。喜びなく過ごし、
そのため彼は(家臣団との)争いの 難儀をなめた、
長い大苦痛を。君はこのことから己を教育し、
男の美德を学ぶがよい！わしはこの物語を君のため
齢重ねた知恵者として語ったのだ。語るも驚異なるは、
1725 いかにも全能なる神が 人類に
偉大なる御心から 知恵を授けておられるかだ、
住む土地と身分と共に；神はすべてに支配権を持ち給う。
時々神は懐かしき故郷に 向けさせ給う
人の心の思いを 誉れある一族の；
1730 故郷で彼に与え給う 地上の喜びを
保持すべき、つまり人々の城市を；
(神は)彼に従わせるので、世界の一部を、
広い王国を、彼はわが身の終焉を思うことが、
自分の(知恵なき)愚行のために できなくなる
1735 彼自身は繁栄の中に安住し、何も彼を妨げない、
病も老齢も。また邪悪な思いが
彼の心の中に暗くつのらず、またいずこにても敵意が
刃の憎しみを表すことなく、全世界が彼の
意のままに動く。彼はより悪しきことを知らず —
XXV
- 1740 ついには彼の心の中に 大いなる傲慢が
成長して繁茂する、番人が眠っている間に、
魂の守護者が；その眠りは余りに深い、
雑念に縛られて；殺人者がすぐ近くにいる、
弓矢を悪意もて 射る者が。
- 1745 やがて兜の下で 心臓めがけて射られる、
鋭い矢によって — 彼は己を守る術を知らず —
邪悪な怪しい唆しによって 呪われた妖魔の；
彼には取るに足らなく思える 彼が余りに長く保持
してきたものが；
食欲にして怒りつぱく、驕り高ぶり与えない
1750 金箔の宝環を；そして彼は未来の運命を
忘れて無視する、神が彼に給うていたが故に、
栄光の「支配者」が、栄誉の分け前を。
最後に また起こるのだ、
肉体が はかなく衰え、
1755 死すべき者が倒れることが；次の者が彼の後を襲う、
その者は惜しまず 宝物を分配し、
貴人の伝来の富を、(分配など)恐れぬ者は。

Bebeorh þē ðone bealo-nīð, Beowulf lēofa,
 secg betsta, ond þē þæt sēle gēcēos,
 1760 ēce rādas; ofer-hyda ne gūm,
 mære cempa! Nū is þīnes mægnes blæd
 āne hwile; eft sōna bið
 þæt þec ædl oððe ecg eafopes getwæfed,
 oððe fýres feng oððe flōdes wylm
 1765 oððe gripe mēces oððe gāres fliht
 oððe atol yldo; oððe ēagena bearhtm
 forsited ond forsworced; semninga bið
 þæt ðec, dryht-guma, dēað ofer-sýðeð.
 Swā ic Hring-Dena hund missēra
 1770 wēold under wolcnum ond hiġ wiġe belēac,
 manigum mægþa geond þysne middan-geard,
 æscum ond ecgum, þæt ic mē ænigne
 under swēgles begong ġesacan ne tealde.
 Hwæt, mē þæs on ēple edwend[e]n cwōm,
 1775 gryn æfter gomene, seopðan Grendel wearð,
 eald-ġewinna, ingenga mīn;
 Ic þære sōcne singāles wæg
 mōd-ceare micle. þæs sig Metode þanc,
 ēcean Dryhtne, þæs ðe ic on aldre ġebād,
 1780 þæt ic on þone hafelan heoro-drēorigne
 ofer eald ġewin ēagum stariġel
 Gā nū tō settle, symbel-wynne drēoh,
 wīġge-weorpad; unc sceal worn fela
 mǣpma ġemāænra, sīpðan morgen bið."

自らをその邪悪から守るがよい、親愛なるベオウルフよ、
 いと優れたる者よ、そしてあのより良きものを選ぶがよい、
 1760 永遠のご利益を； 傲慢など心に懷かぬように、
 名高き勇士よ！ 君の力の評判は今
 一時である； またすぐに起こるだろう、
 君から病か刃が 力を奪うことが、
 或いは火の手が 或いは洪水の渦が
 1765 或いは剣の攻撃が 或いは槍の飛翔が
 或いは恐ろしい老齡が； はたまた目の明るさが
 失われ暗くなる； 遠からず起こること
 君に、勇士よ、 死が打ち勝つことが。
 こうしてわしは「鎖鎧の」デネを 50年間
 1770 天の下で支配してきた そして彼らを戦で守った、
 幾多の民族から この中津国中の、
 とねりこの槍と剣で、 それ故わしは何人も
 広い空の下で 敵には数えなかった。
 見よ、それ故我が祖国に 逆転が訪れた、
 1775 喜びの後に悲しみが、 グレンデルが、
 古き敵が、 我が侵入者となつてからは；
 わしはこの訪れのために 絶えず懷いた、
 大いなる心の悲しみを。 神に感謝を捧げよう、
 永遠の主に、 いやしくもできたことに対し、
 1780 わしがこの首級を 血に染まつた、
 長き争いの後に 我が眼で眺めることが！
 さあ席に着かれよ、 楽しい宴を楽しまれよ、
 戦に秀でた人よ； 我ら二人のためにあまたの
 宝を分かち合うことにしよう、 明日が来たら』

註

1. Hamilton, M. P., "The Religious Principle in *Beowulf*", *PMLA*, LXI (June 1946), 309-31.
- Kaske, R. E., "*Sapientia et Fortitudo* as the Controlling Theme of *Beowulf*", *Studies in Philology*, LV (July 1958), 423-57.
- Goldsmith, Margaret E., "Christian Perspective in *Beowulf*", *Brodeur Festschrift* (1963), 71-90.
- , "Hrothgar's Admonition to *Beowulf*", Ch. 6 of *The Mode and Meaning of Beowulf* (Athlone P., 1970), 183-209.

Goldsmith (1970, p. 46)によれば、まず説教のきっかけになった洪水で滅ばされた巨人 (Nephilim) については「創世記」(Genesis) 6章4-7節で記述されているが、「知恵の書」(Wisdom) にも「高慢な巨人たちが滅ばされた時」(cum perient superbi gigantes) と述べられており、St Gregory は *Moralia*, PL 76, 24 f で巨人を傲慢の罪により地獄落ちしたもののたちのシンボルとみなしているという。

さらに Goldsmith (1970, p. 187) はこの説教で、「知恵」は神が人間に授けたもの (1726-5) であり、*Beowulf* は *mid modes snyttrum* (1706a) 「心の分別 (知恵) で」力を御しているが、神を忘れた人間は「彼の知恵なき心のために」*for his unsnyttrum* (1734a) この世の終焉を想うことができなくなる、と述べられていることについて、St Augustine の「現世のものに執着する者は傲慢と貪欲に支配され、理性によって支配される者は永遠の善 [掟] (lex aeterna) なるものに心を向ける」(*De libero arbitrio* (*On the Free Choice of Will*), CSNL 74. pp.

19 f.) を引いている。

Goldsmith (1970, pp. 193-95) は 1740-68 行には教父たち、特に Gregory の *Moralia* (PL, 75, 943) が表した誘惑と罪のイメージにあふれているという。また彼女は *Beowulf* 1741-47 行の「(傲慢が成長するのは) 魂の番人が眠っていてその危険から身を守る術を知らないときである」と言う部分は、Ambrose, *Exameron*, CSEL 32, p. 240 の「眠らない番人は危険を回避できる。徹夜の番をしていれば、悪魔の(「説教」のように弓矢による傷ではないが) 邪悪な言葉による傷を負わなくてすむ」の影響があると見ている。

また彼女 (1970, p. 196) は、1740 行の「大いなる傲慢」*oferhygda dæl* は Moses がヨルダン川を渡る前にイスラエルの民に行った戒め「あなたが食べて満足し、立派に家を建てて住み牛や羊が殖え、銀や金が増し、財産が豊かになって、心おごり、あなたの神、主を忘れることのないようにしなさい」(Deut. 12:14) を思い出させるという。しかし彼女が教父たちの説と「説教」がパラレルとみなした、以上の3点は筆者には表面的・部分的な類似であって、直接的な関連付けは無理のように思える。

Kaske (pp. 281-82) は作品 *Beowulf* 全体でも、Hrothgar の説教でも、*sapientia* (知恵) が *fortitudo* (力) と並んで主題となっていると主張しているが、神が賜る知恵 (Il. 1724-27) についての聖書での言及箇所を9箇所挙げている (p. 280)。

また、1740-42a の *oð þæt him on innan ofer-hygða dæl / weaxe[ð] ond wrīdæð, þonne se weard swefeð, / sāwele hyrde* 「ついには彼の心の中には大いなる傲慢が / 成長して繁茂する、番人が眠っている間に / 魂の守護者が」は Augustine の *De libero arbitrio*, III, 24, 73 の *Superbia enim avertit a sapientia* (Pride turns one from wisdom) ほかとパラレルで、この *sāwele hyrde* 「番人、魂の守護者」は *sapientia* を指すと主張している (p. 281)。さらに Kaske は、「説教」の中の無名の王が、*gýtsað grom-hýdig, nallas on gýlp seleð / fæ[it]je bēagas* (1749-50a) 「貪欲にして怒りっぽく 驕り高ぶり与えない / 金箔の宝環を」と貪欲 (*avaritia*) について語られるが、Gregory, PL 76, 150; PL 75, 1973-74 も引いているように、聖書の I Tim. 6-10 であらゆる罪の根本であると述べられており、傲慢 (*superbia*) に由来するものであると説明している。

このように Kaske は「説教」に聖書釈義の影響を何箇所か認めながらも、「説教」の主題は *sapientia* の涵養であると見ている彼は、Hrothgar の目的は「永遠の救い」(eternal salvation) ではなく「王道」(wise kingship) を説くことであるという解釈を示している。

他方、聖書釈義の影響を認めない研究者も多い。例えば、K. Sisam, *The Structure of Beowulf* (Oxford U. P., 1965), pp. 78-79: "... they put forward no characteristically Christian doctrine. Most intelligent men would agree that overweening is a vice, especially in the crude form that Hrothgar thinks of— miserliness, rapacity and the wanton killing of companions (1709 ff.). Reversals of fortune (1769 ff.) are a commonplace subject of reflection and story among pagans. So are the shortness and uncertainty of human life (1753 ff.)." や John Halverson, "Beowulf and Pitfalls of Piety", *University of Toronto Quarterly*, xxxv, no. 3, April, 1966, 261-78. などである。

2. 荻部恒徳『「ベーオウルフ」の物語世界』(松柏社、2006)、第2章『「ベーオウルフ」における「王」vs「英雄」』参照。

3. 古英語詩における「傲慢」の扱いを見る。

Daniel における「傲慢」

イスラエルの民は神の導きに従い、それに従わぬ他民族を滅ぼして戦勝の祝いをする。しかしその酒宴の席で傲慢が生じ、神の教えを捨て去った。これを悲しんだ神は聖霊を送り、彼らに「知恵」(*snytro*) を授ける。彼らも一時は知恵が真実であることを信じたが、やがて地上の喜び (*eorðan drēamas*) への欲望が彼らから永遠の救済 (*ēces rædes*) を騙し取り、その結果ついに神の教えを自ら放棄し悪魔の姦計に乗ってしまった。*Daniel* での「傲慢」は神のお蔭で順風満帆になったものの、(自らの力でそうなったように思い、) 傲慢が心に生まれ、知恵をも捨て去り、現世の喜びのために永遠のご利益を省みず、悪魔の軍門に下ることを指す。

Vainglory における「傲慢」

宮殿の酒宴の席で人々は酒に酔って大声でわめきちらすが、気が大きくなった者(詩人は後半対照的に神とともにある謙虚な者 (*ēaðmōd*, 68b, 78a) を導入する) は自分が偉そうに見えろと思ひ、傲慢な言動を取る。

傲慢は悪魔の策略であり、心が「悪魔の弓矢で」(*fēondes fligepilum*, 27a) 射られたり、「飛び矢の雨に打たれる」(*scūrum scēoteþ*, 35a) 結果であるとメタファーが用いられる。傲慢な心は決して満ち足りたものではなく、不満と嫉妬にさいなまれる。Heremodも貪欲にとらわれたように、傲慢の結果、負(マイナス)の感情に襲われるのは悪魔の策略によるのである。

Rhyming Verse における「傲慢」

宮殿で良き臣下に贈物をし、彼らにかしずかれ、何ひとつ不自由せずこの世の喜びを享受している王の独白が語られる(1-40)。その王の心に突然怒りが生じ貪欲が頭をもたげ、悩みにさいなまれる(41-54)。そんな風にこの世では王者は力と幸福を失い倒れる(55-58)。その結果、世は乱れ民は滅びる(59-69)。次にまた一人称に帰り、自らの墓を想像する(70-79a)が、一転、神の慈悲にすがる思いになり、永遠の喜びを得ようとする(79b-87)。この作品では「傲慢」という用語は用いられてはいないが、幸福な王がその絶頂期に罪の心に犯されるパターンはSermonなどと同じである。

4. この句は議論の多いところだが、キリスト教的解釈(Goldsmith (1970) など)を採るかゲルマン的世俗的解釈(Charles Donahue, 'Beowulf and Christian Tradition: A Reconsideration from a Celtic Stance', *Traditio* 21 (1965), 55-116 など)を採るかで意味が違って来る。前者の場合は、「神の法(十戒など)を遵守して永遠の救いを願う」ことになり、後者の場合は、「死後(永遠)に残す名声を選ぶ」ことになる。同句が古英語キリスト教詩のDaniel 30b とExodus 516b にも用いられているが、前者の意味である。

しかしこの説教ではそう単純にキリスト教的意味か世俗の意味かではなく、「永久不変に勧められる」と信じられている「生き方」といった倫理的なものである。エピソードに出てくるHamaについても同句が用いられている(1201b)が、Hamaの場合はこれほど文脈がないのではっきりせず、漠然と「立派な生き方をした」といった、やはり倫理的な意味であろう。

5. A. G. Brodeur, *The Art of Beowulf* (U. of California P., 1959), pp. 208-15 and Goldsmith (1963), p. 83; (1970), p. 207.

BrodeurもGoldsmithも、HrothgarのSuperbiaとAvaritiaの警告はAugustineとGregoryに依拠したもので、Hrothgar自身Heorotを建てて、傲慢の罪を犯したか犯しそうになったために、Grendelの来襲に遭ったと反省或いは意識していると述べている。とすればHrothgarは自戒を込めてBeowulfに警告していることになるが、原文からはそれは感得できない。

6. wēnde se wīsa, þæt hē Wealdende
ofer ealde riht ēcean Dryhtne
bitre gebulge; brēost innan wēoll
þēostrum geponcum, swā him gepýwe ne wæs.

(2329-32)

賢者(B)は思った、自分が「支配者」を
古い掟に反して、永遠なる主を、
ひどく怒らせたのだと； 胸中は沸き立った
暗い思いで； こんなことは彼の常ではなかった。

7. W. C. Bolton, *Alcuin and Beowulf: An Eighth-century View* (Rutgers U. P., 1978), pp. 128-34.

Boltonによれば、Beowulfの成立とはほぼ同時代(8世紀中ごろ)の学僧Alcuinはその書簡で、養子の王子に説教を垂れる形でいくつかの説教を残しているが、その一つでHrothgarのような王に、Remember Heremodと言うのと同じように、Remember Roboam (Rehoboam, レハブアム)と言わせているという。レハブアムは『列王記上』、12章1-24節、14章21-31節に言及されているユダの王で、長老の意見を聞かず国を分裂させた悪王として知られている。Boltonはそのほかにいくつか‘Hrothgar’s Sermon’とパラレルな聖書釈義の例を挙げているが、そのうち妥当だと思われるものはBeowulf 1724-57 = Eccles. 6:1-2のみである。

8. Elaine Tuttle Hansen, “Hrothgar’s ‘Sermon’ in Beowulf as parental wisdom”, *Anglo-Saxon England*, 10 (1982), 53-67.